

CCX							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	・思いやりの心の育成 ・清掃活動	・自己有用感を育み、自他ともに認め合うことのできる生徒を育成する。 ・健康で安全な学校生活が送れるよう、環境整備と安全に努める。 ・清掃指導の徹底を図り、学習環境を整える。	・各集会や日々のホームルームにおいて、自己有用感を育成するような講話を行う。 ・「気になる生徒」を早期発見し、適切に対応する。 ・毎月安全点検を実施し、校内外の危険箇所を速やかに対応する。 ・着いた学習環境を整えるため、清掃活動を全職員・全生徒で実施する。 ・個人で出したゴミの持ち帰りについて徹底を図る。	B	・早期に悩みの解決を図るよう速やかに対応はしたが、クラスや部活動での人間関係の悩みを訴える生徒が多かった。 ・安全点検は、職員の協力により毎月実施し、校内外の危険箇所を把握することができた。 ・掃除については、生徒の取り組み状況は良いが、教室ロッカーの整理整頓が十分でなかった。 ・トイレペーパーを「ハチカチ代わり」を使う男子が多く、スリッパをきちんと並べていないことが多かった。	・生徒の様子を常に観察しながら職員間の連携を密にし、生徒の悩みや「気になる生徒」の早期発見と適切な指導に取り組んでいきたい。 ・定期的にロッカーの点検をし、整理整頓が不十分な生徒に注意喚起をする。
	●いじめの問題への対応	いじめのない学校づくり	・深い生徒理解に立ち、生徒がいきいきした学校生活を送れるように留意する。 ・いじめの早期発見・早期対応に努める。 ・万一いじめが起こった場合、その解消に全力を挙げて取り組む。	・全人格的な接し方を心がけ、生徒との深い信頼関係を築くようにする。 ・生徒の実態をきめ細かく把握するように努める。 ・学期に1回、いじめに関するアンケートを実施する。 ・スクールカウンセラーや養護教諭と連携して、いじめの把握、迅速な対応を図る。	B	・年間いじめ認知件数は18件であった。重大事案に該当することなく、継続的ないじめでもなかったが、いじめの捉え方の違いが目立った。友人関係の中での発言がいじめと認知することが特に多かった。本人、保護者との連絡を早急にしたことで解消できた。	・いじめの定義を理解してもらおう促していきたい。そのことで未然防止につながるようにしたい。またアンケートを来年度も実施し、早期解決をはかりたい。
	●健康・体づくり	・望ましい生活習慣の形成 (自主的な健康管理)	・毎日の朝食摂取を目指す。 ・定期健康診断の結果に基づく、早期治療への啓蒙を図る。 ・ICTを活用した保健指導の充実を図る。	・保健だよりを通して、朝食の必要性または食事の重要性について啓蒙していく。 ・健康診断の結果について、本人・保護者に周知徹底し、早期治療を促す。 ・健康診断結果や保健室利用状況を活用し、自己の健康に関心を持たせ、生徒自身が健康課題を解決するために必要な知識や能力を育成する。 ・朝や帰りのホームルームで、健康づくりのための啓蒙を生徒保健委員を通して発信する。	B	・健康診断の項目ごとに「健康診断だより」を発行し、健康診断の意義を理解したうえで受診できるよう指導した。健康診断結果は一覧にして一学期三者面談時に配付した。歯科や視力の専門医療機関受診があまりできていない。 ・健康づくりのための啓蒙を、保健だよりや生徒保健委員活動を通して発信した。 ・保健室利用率は前年度と同程度であった。	・健康診断結果を踏まえた専門医療機関への受診率を向上させるため、健康診断後の個別指導の時間を設ける。 ・生徒の実態に応じた内容の保健指導を実施する。
	○生徒指導	・基本的生活習慣の確立 ・規範意識の育成	(第1学年) 学校生活への早期適応を目指し、体調面や精神面での管理やサポートを充実させる。 (第2学年) 「落ち着いた生活習慣の確立を育成」を目指す。 (第3学年) リーダーの学年として、伊高をけん引する。	(第1学年) ・本校で学ぶこと、生活することに対する誇りと自信をつけさせる。 ・快適な集団生活のため、校則の順守、教室整備などの環境を整えさせる。 ・挨拶を徹底する。 (第2学年) ・基本的生活習慣を確立させる。 ・校則、社会のルールを守らせる。 ・人を大切にすること。 ・時間を意識して行動する。 (第3学年) ・学校生活のあらゆる場面で、自分たちの後ろ姿であるべき姿を示させる。 ・事前の連絡と相談を確実に行った上で、自信をもって物事にあたらせる。	B	・昨年度から時間を設定し校地内乗り入れを許可したため、送迎に関する問題はある程度解消できた。 ・いじめ件数が10件を超えた。主に友人同士の会話の中で発生しており、お互いの信頼関係の度合いの違いを感じた。 (第1学年) ・高校生活・学習習慣を確立させるまで時間を要した生徒が少なからずいた。 ・環境整備に関しては、私物の管理など学年共通の指導を徹底できた。 ・上級生を見習い、生徒、教師、来校者に対して積極的に挨拶ができるようになった。 (第2学年) ・1学期に問題行動があり、生徒指導措置ゼロでなかったのが、残念であった。 ・3学期になり、寒くなったせいもあってか、遅刻や欠席が増加した。 ・修学旅行では、ほとんどの生徒がきちんとルールと時間を守ることができた。 (第3学年) ・部活動や伊高祭などの学校行事の他、図書館での自主学習や全校集会での集合・整列の姿で、最上級生としてリーダーシップを発揮した。	・送迎に関しては、設定された時間を守るよう生徒・保護者に周知徹底することが課題である。 ・いじめに関しては友人関係の築き方、違いについても集会、HR等で話す必要がある。またいじめの認識についても十分理解させることを行いたい。 (第1学年) ・改めて学校生活・進路に対する明確な目標を持たせる。 ・提出物などの期限を守るなど、身の回りのことに対して責任を持てるよう指導を徹底していく。 (第2学年) ・引き続き、時間を守ることの大切さを意識し、行動させる。 ・出願などの手続きを早め早めにするを意識づける。 ・最後まで頑張る生徒を応援する雰囲気づくりを徹底する。
○生徒会活動	・各種委員会の活性化 ・新しい時代の伊高祭の創造 ・部活動の活性化	・主体的な委員会活動が年間を通じて継続できるよう目標及び活動計画を明確化し、システム化を図る。 ・体育の部のリーダー活動及び競技種目の見直しを継続する。 ・文化の部の文化的な意識の向上及び細部への配慮を行う。 ・課外活動の時間を確保し、文武両道を達成できる環境づくりに努める。 ・各部活動で下校時刻の厳守、学習への取り組みを促す。	・生徒のリーダー性を養成するために、教育活動全体を通して生徒の主体性と自主性を向上させる取組を立案・実践していく。 ・部活動の活動時間については、学校全体や各学年での行事の立案段階で確保できるように努めていく。 ・文武両道を実現するために、生徒がより意欲的・主体的に部活動へ取り組めるよう、教職員が指導力向上に研鑽を積んでいく。 ・下校時刻については、全職員の共通実践を徹底することで、時間厳守の定着化を図っていく。	B	・委員会活動においては、昨年度に引き続き、募金を行った。 ・伊高祭体育の部では、1・3年生が参加する新種目を考案し、行った。また、女子リーダーの応援合戦の際のサランを廃したが、生徒への代替策の提示が十分でなかった。 ・伊高祭文化の部では、細部への配慮として休憩室を設置し、熱中症への対策を行った。 ・下校時刻については、校時が変わった影響で活動時間が短くなったためか、守れていない部活動が多かった。 ・伊万里市主催の「2019ハートフルフォーラムin伊万里」では、今年度本校が担当校となり、生徒会中央委員が実行委員となって開催に向けての準備や当日の役割をしっかりとやり、イベントを成功に導くことができた。	・委員会活動では、募金以外でも年間を通してできる活動を設定することで、意義は深まると考える。 ・伊高祭体育の部の新種目は、安全面で課題があったため、再検討する必要がある。その際、実際にやってみるなどの工夫が必要である。 ・下校時刻等の時間厳守については、生徒への周知徹底を行い、職員全体で指導を行っていく必要がある。また、完全下校時刻についても、検討の余地があると考える。	

④ 地元との連携の強化

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○魅力と活力ある高校づくり	・伊万里市や関係機関との連携 ・地元の小中学校との連携	・伊万里市や関係機関あるいは地元の小中学校の担当者や定期的に会合を持ち、連携して校内外の活動を実践していく。	・伊万里市や関係諸機関と協議し、1年生の校外学習活動を実施する。 ・地元の小中学校と協議し、本校や歴史的建造物を使用し、座談会や学習会等を開催する。 ・職業セミナーで地元の企業などで活躍する卒業生に話をしてもらう。 ・伊万里学研究でカブトガニについて、伊万里のやきものについて講演してもらう。	A	・「地域とつながる高校魅力づくりプロジェクト」では1年生は「伊万里を知ろう」と題し、バスや徒歩での視察を通じて伊万里の歴史や代表的企業や大学の研究機関などを訪ね、全学年希望者の「伊万里で学ぼう」のいまり寺子屋では小学生に教える喜びと楽しさを学んだ。1・2年生の「伊万里で語ろう」では「#キセキ部」の授業で5人の伊万里の活性化に頑張る大人の話を聞き、希望者12名が12月と2月のワークショップに参加して、まちを元気にするための課題解決方法などを学んだ。 ・職業セミナーも1年生の7月に実施し、弁護士やパイロット、小学校教諭、薬剤師、医師、建設業、看護学校教師と講師の文系と理系のバランスは適切であったと思う。本校卒業生がほとんどで生徒も身近に進路意識を高められた。 ・伊万里学講演では、本校が長年研究を重ねてきたカブトガニと伊万里出身と言えれば必ず聞かれる、いまりのやきものについて知見を深めることができた。	・「地域とつながる高校魅力づくりプロジェクト」は次年度2年目に入るの、「はちがめプラン」を取捨選択しながらさらに内容を充実させていきたい。「いまりを知ろう」では実施時期を5月ごろに早め、梅雨の時期を避けたい。「いまり寺子屋」では、小学校への案内を早めに周知徹底させた。 ・職業セミナーについては講師の選定や実施日の設定など学年との打ち合わせを早くから綿密に行う。 ・伊万里学講演と「地域とつながる高校魅力づくりプロジェクト」の重複がないように年間指導計画を検討し再設定する。

⑤ 本年度の重点目標に含まれない評価項目

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○学校経営方針の周知	・学校教育目標の周知 ・キャッチフレーズの周知 ・本年度の重点目標の周知	・学校評価アンケートのそれぞれの項目で周知率を80%以上にする。	・各教室やコモンホール、昇降口、事務室前などにキャッチフレーズを掲示し、誰もがいつでも目に触れるようにする。 ・学校から発信する情報(ホームページ、はちがめ便り等)を通じて紹介する。 ・毎日のホームルームや集会の際に話題に取り入れて生徒に対し話をする。 ・保護者に対して、後援会総会や学年保護者会等の機会に紹介する。	B	・ホームページや「はちがめだより」でキャッチフレーズは常時掲載し、周知に努めた。 ・学校評価アンケートでの保護者の「校訓・学校経営ビジョン」の周知度は79.7%、「重点目標」は70.8%だった。 ・キャッチフレーズについては、各教室に掲示したり、学校通信(はちがめ便り)に毎回掲載するなどして、生徒や保護者に浸透した。	・学校案内だけでなく、学校から発信する様々な情報や配布物を通じて、学校の教育目標やキャッチフレーズの周知を図っていく必要がある。 ・キャッチフレーズを生徒・保護者・職員が周知することで学校の活性化につなげていく。
	○開かれた学校づくり	・魅力あるホームページの構築 ・広報紙の定期的発行・配布	・ホームページ利用可能な保護者の70%、近隣中学生の80%以上の利用を目標とする。 ・後援会総会の出席率を50%以上にする。	・ホームページの新着情報を充実させ、最新の情報を提供する。 ・広報誌「はちがめ便り」を月1回のペースで発行し、地域や中学校への情報発信を拡充する。 ・後援会総会の内容を充実させ、複数回案内文書を出したり、生徒や支部の役員を通じて参加の呼びかけを活発にする。	B	・学校評価アンケートで「伊万里高校のホームページ」の保護者の周知度は70.7%、外部の周知度は85.0%でありよく見られている。こちらもホームページの新着情報を充実させ、最新の情報を提供しよう努めていったが、手続きの複雑さもあり、十分とはいえなかった。 ・広報誌「はちがめ便り」は学校行事や生徒の活動を中心に、できるだけ最新の情報を的確な時期に提供しよう努め、定期的に発信することができた。 ・後援会総会の出席率は50.3%であり、目標の数値を超えることはできた。	・ホームページも「はちがめ便り」も、生徒の個人情報の取り扱いには細心の注意を払いつつ、最新の情報を掲載し、よりいっそう充実した内容になるように努めていく。 ・後援会総会については、より一層出席率を上げるため、入学式や役員会など様々な機会を通して粘り強く呼びかけていく。
	○教職員の資質向上	・各種研修会の実施 ・分掌会議、教科会議の充実	・校内で実施する研修会や講演等への職員の参加率を90%以上にする。 ・勤務時間内に設定している毎週の分掌会議、学年会議、教科会議の時間を有効に活用する。	・生徒を指導する上で必要な各種研修や指導力の向上につながる研修を各分掌で企画し適宜実施する。また、生徒対象の集会や講演会にも職員も参加し研鑽の場とする。 ・各会議で個々の意見を反映させ、共通理解のもと組織的に取り組む体制をつくる。 ・各教科で研究授業や公開授業を実施し、教科の学力向上と指導力向上について研究する。	B	・さまざまな講演会や研修を通じて、教員としての資質を向上することができた。 ・経過研の研究授業を通じて、教科指導について議論する場を設けることができた。 ・予備校や各種研究団体の研修会に参加することで、教科指導力の向上を図ることができた。	・教科指導力向上のために、週1回の教科会議をうまく活用する必要がある。 ・教科内はもちろんのこと、教科外でも授業を見せ合い、指導法等について情報交換をする場を設ける必要がある。 ・教員一人一人が普通科進学校に必要な教科指導力とは何かを改めて問い直し、自己研鑽に励む必要がある。
	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	・校務等の効率化の推進 ・日常業務におけるICT機器の効果的な活用	・職員間の情報共有を積極的に進め、業務への効率的な取組を推進する。 ・連絡や調査をペーパーレスで行い、業務の効率化を図る。	・定時退勤推進日を週1日設け、職員に周知徹底し、時間外勤務を少しでも減らす努力をする。 ・日々の連絡や各種調査等をPCを用いて行い、集計等の効率化や時間の短縮など業務軽減につながるよう工夫する。また、その方法について、学年や分掌間で情報交換を行い、活用する機会を広げていく。	B	・定時退勤推進日は設定したものの、職員への周知が十分でなく、効果は薄かった。 ・職員朝礼の簡素化やスピード化に取り組み、一定の効果上げることができた。 ・各種アンケートの実施については、積極的に学習用PCを活用することができた。 ・校舎の戸締まり当番を廃止し、生徒・職員が各自の責任を果たすことで、大きなトラブルもなく戸締まりを完了することができた。	・定時退勤推進日の設定はもちろんのこと、学校として定時退勤日を設定することも必要ではないかと考える。 ・連絡事項の確認を各自がきちんと行えるように、日頃から声かけをしっかりとしていく必要がある。 ・新教育情報システムの機能を全職員が十分に把握できるように職員間で情報を共有する必要がある。

●は共通評価項目、○は独自評価項目